

1. 20 [金]	第13回 読響アンサンブル・シリーズ よみうり大手町ホール／19時30分開演(19時から解説) Yomikyo Ensemble Series, No. 13 Friday, 20th January, 19:30 (Pre-concert talks from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall
-----------	---

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《カンブルラン指揮の小編成オーケストラ》

指揮／シルヴァン・カンブルラン(常任指揮者)

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING **P.7**

クラリネット／藤井洋子(読響首席) Clarinet YOUKO FUJII (YNSO Principal)

ナビゲーター／鈴木美潮(読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)
Navigator MISHIO SUZUKI

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ロッシーニ 歌劇《セビリアの理髪師》序曲 [約8分]
ROSSINI / “The Barber of Seville” Overture

ウェーバー クラリネット協奏曲 第2番 変ホ長調 作品74 [約19分]
WEBER / Clarinet Concerto No. 2 in E flat major, op. 74
I. Allegro
II. Romanza : Andante con moto
III. Alla polacca

[休憩 Intermission]

モーツァルト 交響曲 第40番 ト短調 K. 550 [約35分]
MOZART / Symphony No. 40 in G minor, K. 550
I. Molto allegro
II. Andante
III. Menuetto : Allegretto
IV. Allegro assai

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

1. 25 [水]	第600回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 600 Wednesday, 25th January, 19:00 / Suntory Hall
-----------	--

指揮／シルヴァン・カンブルラン(常任指揮者)

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING **P.7**

女声合唱／新国立劇場合唱団

Women's Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS **P.9**

合唱指揮／富平恭平 Chorusmaster KYOHEI TOMIHIRA

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

デュカス 舞踊詩《ラ・ペリ》 [約19分] **P.11**
DUKAS / La Péri

ドビュッシー 夜想曲 [約25分] **P.12**
DEBUSSY / Nocturnes
I. 雲
II. 祭り
III. シレーヌ

[休憩 Intermission]

ショーソン 交響曲 変ロ長調 作品20 [約30分] **P.13**
CHAUSSON / Symphony in B flat major, op. 20
I. Lent – Allegro vivo
II. Très lent
III. Animé

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

1.31 [火]	第566回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 Subscription Concert, No. 566 Tuesday, 31st January, 19:00 / Suntory Hall
----------	---

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.7

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

メシアン 彼方の閃光 [約75分] P.14

MESSIAEN / Éclairs sur l'au-delà

- I. 栄光あるキリストの出現
- II. 射手座
- III. コトドリと神と婚姻した都
- IV. 刻印された選ばれし人々
- V. 愛の中に棲む
- VI. トランペットを持った7人の天使
- VII. 神は人々の目から涙をあまさず拭いたもう
- VIII. 星たちと栄光
- IX. 生命の樹に棲む多くの鳥たち
- X. 見えざる道
- XI. キリスト、天国の栄光

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。

*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
[助成] 公益財団法人アフィニス文化財団 
[協力] アフラック

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

2.4 [土]	第194回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 194 Saturday, 4th February, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
2.5 [日]	第194回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 194 Sunday, 5th February, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.7

ヴァイオリン／シモーネ・ラムスマ Violin SIMONE LAMSMA P.9

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

チャイコフスキー ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 [約33分] P.17

TCHAIKOVSKY / Violin Concerto in D major, op. 35

- I. Allegro moderato – Moderato assai
- II. Canzonetta : Andante
- III. Finale : Allegro vivacissimo

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー 交響曲 第5番 ホ短調 作品64 [約44分] P.18

TCHAIKOVSKY / Symphony No. 5 in E minor, op. 64

- I. Andante – Allegro con anima
- II. Andante cantabile, con alcuna licenza
- III. Valse : Allegro moderato
- IV. Finale : Andante maestoso – Allegro vivace

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

[事業提携] 東京芸術劇場



芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー プレコンサート

2月5日(日)の《第194回 日曜マチネーシリーズ》では、開演前の13:35から、「芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレコンサートをコンサートホールで開催します。

2.11 [土・祝]

第93回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール／14時開演
Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 93
Saturday, 11th February, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／小林研一郎 (特別客演指揮者)

Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI P. 8

チェロ／宮田 大

Cello DAI MIYATA P.10

コンサートマスター／長原幸太

Concertmaster KOTA NAGAHARA

ドビュッシー (ビュッセル編曲) 小組曲 [約13分]

P.19

DEBUSSY (arr. BÜSSER) / Petite suite

- I. 小舟にて
- II. 行列
- III. メヌエット
- IV. バレエ

サン＝サーンス チェロ協奏曲 第1番

イ短調 作品33 [約19分] P.20

SAINT-SAËNS / Cello Concerto No. 1 in A minor, op. 33

- I. Allegro non troppo - II. Allegretto con moto - III. Tempo primo

[休憩 Intermission]

サン＝サーンス 交響曲 第3番 ハ短調 作品78 〈オルガン付き〉 [約36分]

P.21

SAINT-SAËNS / Symphony No. 3 in C minor, op. 78 "Organ"

- I. Adagio - Allegro moderato - Poco adagio
- II. Scherzo : Allegro moderato - Presto - Maestoso - Allegro

オルガン／長井浩美

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[協力] 横浜みなとみらいホール

Maestro of the month

今月のマエストロ

シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者)
Sylvain Cambreling

満を持して取り上げる
メシアン最晩年の精華



フランス近現代音楽の演奏で揺るぎない名声を得ているわれらのマエストロが、余人をもって代えがたい解釈と卓越した色彩感を駆使して、メシアン最晩年の大作〈彼方の閃光〉に臨む。ショーソン唯一の交響曲で聴かせてくれるであろう、みずみずしくあでやかな叙情性にも注目したい。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者を歴任し、現在はシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督とクラングフォーラム・ウィーンの首席客演指揮者を兼任する。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マイントツのヨハネス・グーテンベルク大学で指揮科の招 聘教授も務める。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルをはじめとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

録音にも積極的で、読響とは「幻想交響曲ほか」「ベトルーシュカほか」「第九」「春の祭典／中国の不思議な役人」「スコットランドほか」をリリースしている。

- ◇ 1月20日 読響アンサンブル・シリーズ
- ◇ 1月25日 名曲シリーズ
- ◇ 1月31日 定期演奏会
- ◇ 2月4日 土曜マチネーシリーズ
- ◇ 2月5日 日曜マチネーシリーズ

プログラム

特集

今後の公演案内

読響ニュース

小林研一郎

(特別客演指揮者)

Ken-ichiro Kobayashi

情熱のタクトが描く
サン＝サーンスの名曲

おなじみの特別客演指揮者
“炎のコバケン”が、久しぶりに
サン＝サーンスの名曲を披露す
る。国内の若手チェリスト筆頭
格・宮田大との共演に加え、横
浜みなとみらいホール自慢のオ
ルガンの響きにも注目だ。

1940年福島県いわき市生まれ。東京
芸術大学作曲科および指揮科を卒業。
1974年、第1回ブダペスト国際指揮者
コンクール第1位、特別賞を受賞。ハン
ガリー国立響の音楽総監督をはじめ、
チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フ
ィル音楽監督など国内外の数々のオー
ケストラのポジションを歴任。2002年5
月の「プラハの春音楽祭」オープニング
コンサートの指揮者に、東洋人として初
めて起用されたほか、ハンガリー政府よ
り民間人最高位の“星付十字勲章”を
授与された。11年、文化庁長官表彰受
賞。13年、旭日中綬章を受章。



©読響

現在、ハンガリー国立フィル、日本フ
ィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、
九州響の首席客演指揮者、東京芸術
大学、東京音楽大学およびリスト音楽
院（ハンガリー）名誉教授。12年7月か
らは、東京文化会館の音楽監督も務め
ている。

録音の分野においては現在、読響と
ブラームスの交響曲全集に取り組んで
おり、「交響曲第1番／ハンガリー舞曲
集」「交響曲第3番／シューベルト〈未
完成〉」が発売され、絶賛を博している。

◇ 2月11日 みなとみらいホール 名曲シリーズ

A rtist of the month

今月のアーティスト

女声合唱

新国立劇場合唱団

Women's Chorus
New National Theatre Chorus

合唱指揮 富平恭平

Chorusmaster Kyohei Tomihira

新国立劇場のオペラ公演を担う合唱
団として1997年の劇場オープンととも
に活動を開始した。100名を超えるメン
バーは、高水準の歌唱力と優れた演技
力、緻密なアンサンブルと豊かな声量で
国内外のメディアから高い評価を得てい
る。読響とは2007年以降、年末の〈第
九〉公演をはじめ、モーツァルトの〈レク
イエム〉やヴェルディの〈レクイエム〉な
ど多くの共演を重ねてきた。特に常任
指揮者カンブルランの下では、ベルリオー
ズの〈ロミオとジュリエット〉(2011年9
月)、ラヴェルの〈ダフニスとクロエ〉(12
年12月)、ストラヴィンスキーの〈詩篇
交響曲〉(13年9月)で見事な歌唱を披
露し、好評を博した。

今回は女性メンバーのみの出演となる。

◇ 1月25日 名曲シリーズ



©Otto van den Toorn

ヴァイオリン シモーネ・ラムスマ

Violin Simone Lamsma

オランダ・レーワルデン生まれ。5歳で
ヴァイオリンを始め、11歳で渡英。英国
王立音楽院で学び、19歳で最優秀の成
績で卒業した。これまでに指揮者のズヴ
ェーデンやルイーダの下で、ロイヤル・コン
セルトヘボウ管やフランス国立管、オラン
ダ放送フィル、ロイヤル・リヴァプール・フ
ィル、スイス・ロマンド管などと共演してい
る。録音では、エルガーの小品とシュポ
アの協奏曲がナクソスから出ているほか、
メンデルスゾーン、ヤナーチェク、シューマ
ンのヴァイオリン・ソナタを収めたCDが
チャレンジ・クラシックスから出たばかり。

◇ 2月4日 土曜マチネシリーズ

◇ 2月5日 日曜マチネシリーズ



©Yukio Kojima

チェロ 宮田 大

Cello Dai Miyata

1986年宇都宮市生まれ。3歳からチェロを始め、国内の数々のコンクールで第1位を受賞。桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコースとジュネーブ音楽院およびクロンベルク・アカデミーに学び、2009年ロストロポーヴィチ国際チェロコンクールで日本人として初めて優勝した。小澤征爾、インバル、エッティンガーらの指揮で国内の主要オーケストラのほか、パリ管、ザールブリュッケン・カイザースラウテルン・ドイツ放送フィルなどと共演。また、クレールらと室内楽で共演している。齋藤秀雄メモリアル基金賞、出光音楽賞などを受賞。

◇2月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

1.25 [水]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

デュカス 舞踊詩〈ラ・ペリ〉

作曲：1911～12年／初演：1912年4月22日、パリ／演奏時間：約19分

フランス近代の作曲家ポール・デュカス（1865～1935）は、パリ音楽院で学び、同世代のドビュッシーと親交を結んだ。当時のフランスの多くの作曲家と同様に、デュカスもワーグナーの音楽に心酔したが、作曲においてはどの流派にも属さない独自の道を歩んだ。作品数は少ないものの（完璧主義者のデュカスは、多くの作品を未発表のまま破棄した）、交響詩〈魔法使いの弟子〉（1897）や歌劇〈アリアーヌと青ひげ〉（1907年初演）など、豊かな和声と気品のある叙情性を備えた、音楽的完成度の高い作品を残した。

舞踊詩〈ラ・ペリ〉は、デュカスの最後の大作で、作曲家ダンディに、「ワーグナーの楽劇以後作られた劇音楽の中で最大の力作」と高く評価された。この

曲はもともと、興行主ディアギレフのロシア・バレエ団のために構想されたが、最終的にはナターシャ・トゥルハノヴァ・バレエ団によって初演された。

物語は、ペルシア神話に基づく。古代ペルシアの王イस्कンデルが、不死の花を求めてさまよい、妖精ペリからそれを奪うが、彼女の踊りに魅了され、花を返すとペリは天に昇っていく。

華麗なファンファーレは初演に際して書き下ろされた。舞踊詩は単一楽章で、三つの部分から構成され、第1部はホルンの音色が神秘的な導入部に続き、王イस्कンデルの主題が変奏される。“踊り”とされた第2部は、ペリの踊りの主題が展開される。静かな第3部で、ペリと王の主題が溶け合い、冒頭のホルンの動機が戻ってくる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シロフォン、小太鼓、トライアングル、タンブリン、シンバル、太太鼓）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

ドビュッシー 夜想曲

作曲：1897～99年／初演：1900年12月9日、パリ（第1曲、第2曲）、1901年10月27日、パリ（全曲）／演奏時間：約25分

クロード・ドビュッシー（1862～1918）が独自の音楽語法を確立し、その名前が一躍有名になったのは、1894年に初演された〈牧神の午後への前奏曲〉によってであった。マラルメの長編詩に着想を得たこの作品は、微妙なニュアンスまで色彩豊かに描かれ、20世紀音楽の幕開けとされた。しかし〈牧神〉以後、新境地を拓くのは大変だった。イザイのためにヴァイオリンと管弦楽の〈夜想曲〉の作曲を思い立ったものの、二人の関係が悪化したことから立ち消えとなる。その後しばらくは、メーテルリンクの戯曲によるオペラ〈ペレアスとメリザンド〉（1902年初演）に集中するが、結局は同時進行で、1897年12月からこのオーケストラと女声合唱のための交響的三部作〈夜想曲〉の作曲に着手した。

ドビュッシーが「〈ペレアス〉の5幕より大変だった」と語ったように、半年ほどでスケッチは完成したものの、オーケストレーションには長い時間を要した。この曲のタイトルについて、ドビュッシーは、次のように記している。「夜想曲という曲名は、ここでは総体

的に、華やいだ意味として考えてほしい。従来の夜想曲の形式ではなく、この言葉に含まれる印象のすべてが重要なのです」。3曲それぞれ楽器編成が異なり、トロンボーンとチューバは第2曲だけ、第3曲のみ女声合唱が入る。**第1曲“雲”** ゆるやかな音楽が、雲の陰影を表現する。木管楽器とホルンの柔らかな音色は、やがてヴァイオリンから低弦楽器に広がる。ドビュッシーによれば、「変わることもない空の様子と白みを帯びた灰色の中に消えようとする雲を描いている」。

第2曲“祭り” 軽やかで華やかな色彩が光り輝く音楽。「突然のまぶしい光でかき立てられる祭りのリズム」としているが、中間部では遠くに行進曲のリズムが鳴り響き、「行列が祭りを横切り、溶け込む」様子が描かれる。

第3曲“シレーヌ” ギリシア神話に登場する上半身は女性、下半身は鳥、後に魚の姿をしているとされた、海の怪物シレーヌ（セイレーン）。海の描写と「月の光で銀色に輝く波間から」女声合唱による歌詞をもたないシレーヌの神秘的な歌が揺れ動く。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（フィールド・ドラム、シンバル）、ハーブ2、弦五部、女声合唱

ショーン 交響曲 変ロ長調 作品20

作曲：1889～90年／初演：1891年4月18日、パリ／演奏時間：約30分

フランスのエルネスト・ショーン（1855～99）は、法学を修めた後、パリ音楽院でマスネに師事し、さらに友人のダンディとフランクのもとでも学んだ。当時フランクを尊敬し、彼を師と仰ぐ作曲家たちは、フランク一派（フランクスト）と呼ばれたが、彼らはまたワーグナーの音楽に熱中していた。ショーンのワーグナー体験は、ミュンヘンの〈さまよえるオランダ人〉と〈ニーベルングの指環〉（1879）、〈トリスタンとイゾルデ〉（1880）と続き、1882年にはバイロイトの〈パルジファル〉初演に立ち会った。彼らはワーグナーの革新的な和声や色彩感に影響を受け、自身の創作にも反映させた。

1886年に国民音楽協会（1871年にサン＝サーンスが中心になって同時代のフランスの作曲家による作品の普及を目的に設立された団体）の会長にフランクが就任すると、ショーンはダンディとともに書記を務め、フランス音楽の発展に貢献した。

ショーンの交響曲は、フランクの交響曲ニ短調（1888）の直後に着手された。ここではサン＝サーンスの交響

曲第3番（1886）で先取りされ、フランクの交響曲で注目された循環主題で楽曲を統一する手法が採り入れられ、全体はショーン独特の沈鬱な情緒と甘美な旋律で貫かれた。1891年に作曲者自身の指揮によって国民音楽協会の演奏会で初演され、その後、1897年にニキシュ指揮のベルリン・フィルが取り上げて広く知られるようになった。**第1楽章** ラン（穏やかに）～アレグロ・ヴィーヴォ、変ロ長調 ワーグナーの楽劇のような、ゆったりとした導入部に続き、主部ではホルンとファゴットの明るい第1主題が示され、のびやかな第2主題は、クラリネットと中低弦で始まり、華やかに展開する。

第2楽章 トレ・ラン（非常に穏やかに）、ニ短調 2種類の3音動機で組み立てた重々しい音楽で始まり、ショーンらしい叙情的な中間部をはさむ。

第3楽章 アニメ（快活に）、変ロ長調 弦楽器のリズミックな動きによって力強い管楽器から第1主題が導かれ、ファンファーレ風の第2主題が現れる。第1楽章冒頭の循環主題がたびたび反復され、全体が統一される。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハーブ2、弦五部

佐野光司 (さの こうじ)・桐朋学園大学名誉教授

メシアン
彼方の閃光

作曲：1987～91年／初演：1992年10月5日、ニューヨーク／演奏時間：約75分

オリヴィエ・メシアン（1908～92）の全11楽章から成る大作〈彼方の閃光〉は、ズービン・メータとニューヨーク・フィルハーモニック管弦楽団から創立150周年記念として委嘱された。作曲は1987年から91年にかけて行われた最晩年の作品である。内容は神の地、彼岸とエルサレムへの瞑想である。

初演は1992年10月5日、ズービン・メータ指揮、ニューヨーク・フィルによって行われたが、同年の4月28日にすでにメシアンは他界していた。曲はメシアン83歳の時に完成されたが、さすがに往年のダイナミズムは後退している。しかし、内面的な深みや晩年のメシアンの到達した境地、静的な構成と多彩な響きの世界の双方が、見事に一体化している。

メシアンは音楽評論家クロード・サミュエルとの1980年代半ばの対話のなかで、「日本の音楽は静的です。私の音楽も静的です。私が彼岸を、永遠を信じているからです。東洋人は私たちよりずっと彼岸なるものの近くにいるので、彼らの音楽は静的なのです」と語

っているが、この〈彼方の閃光〉はまさに彼のそうした態度が現れている。特に第5楽章の静けさは、東洋的ですからある。メシアンの目には、はっきりと「彼岸」が映っていたに違いない。

メシアンのオーケストラ曲の原点は〈トゥーランガリラ交響曲〉にあり、多くの作品にその痕跡が聴かれた。しかし、この作品ではかつてのオーケストラ作品ほどあからさまではない。一つには、晩年のメシアンが旋律性をより強く表面に出す作法に回帰していることと関係しているだろう。前衛の時代の、響きの鋭い対立や厳しい対照性を避けて、内省的な次元に入っている。

この作品で最も〈トゥーランガリラ交響曲〉の痕跡が現れるのは第10楽章だ。不思議なもので、それを聴くとむしろほっとする。最終楽章でも第5楽章と同様にメシアンは「彼岸」の世界を見ているかのようだ。その宗教的な内省の世界は、過去の作品より深度を増している。

この曲にもメシアンが採譜した合計48

種類もの鳥の声が使われているが、第1、5、6、11楽章には鳥は現れない。つまり冒頭と終楽章、および中央の二つの楽章では鳥を用いず、全体は緩いシンメトリーを成している。鳥は第2楽章（7種の鳥）、第3（1種）、第4（8種）と増減しつつ、第7（2種）、第8（15種）、第9（25種）、第10（1種）に用いられて、第8、9楽章がこの作品の鳥のクライマックスとも言える構成となっている。楽器編成も鳥の出ない第1楽章は管楽器のみ、最後の第11楽章は弦楽器のみと対照を成し、同じく鳥の現れない中央の第5楽章は弦楽器のみで、第6楽章は管楽器と金属打楽器のみと対照的になっている。

鳥はメシアンにとって神の使いである。中央の二つの楽章と、開始と終わりの楽章に鳥が用いられないのは、そこが人から神の栄光を歌う場となっているためだ。

また、楽章のほとんどは「ゆっくりと（Lent）」の表示があり、それが無い楽章は第3、4、9楽章の三つである。そのためか、全体にゆったりした音楽となっている。そして、どの楽章にも総休止（ゲネラルパウゼ）が多く用いられており、その沈黙がある時は内省的になり、ある時は強い緊張力を生んでいる。また、形式的な区分の意味を持つ楽章もある。

メシアンによれば、作品全体の和声は自ら考案した「移調の限られた旋法」

の第2番、第3番を中心に作られているという。

第1楽章 “栄光あるキリストの出現”（ゆっくりと、厳かに）全体が荘厳なコラールであり、木管楽器と金管楽器のみで奏される。グレゴリオ聖歌の、あるモチーフを想わせよう。

第2楽章 “射手座”（やや、ゆっくりと）管楽器と金属打楽器のみによるコラール風な音楽で始まり、弦楽器が加わったところから鳥の声が入る。弦楽器のみのグリッサンドの後、鳥たちの合唱となる。このパターンを2回繰り返した後、コーダとしてコラールと鳥で静かに終わる。

第3楽章 “コトドリと神と婚姻した都”（やや活き活きと）この楽章では2音の下行音形がずっと響くが、それがコトドリである。マリンバで打たれるリズムは羽ばたきのように響く。稀に上行3音があるが、それもコトドリである。**第4楽章** “刻印された選ばれし人々”（中庸な速さで）鐘や弦楽器群の和音の上を、ピッコロ、フルート、クラリネットによる鳥たちの鳴き声が終始する。和音の持続はメシアン固有の法則に従っている。

第5楽章 “愛の中に棲む”（ゆっくりと“非常に愛情を込めて”）弦楽器のみによる静かなゆったりした音楽。その旋律は荘厳さと慈愛に満ちており、静けさの中にトゥッティ（総奏）で現

2.4 [土]

2.5 [日]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

チャイコフスキー
ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

作曲：1878年／初演：1881年12月4日、ウィーン／演奏時間：約33分

ロシアの大作作曲家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）が生んだ、当ジャンルの代表作のひとつ。1877年夏に結婚し、直後に破綻した彼は、10月から翌1878年4月までヨーロッパで静養した。本作は、同年1～2月にイタリアで完成された交響曲第4番、歌劇〈エフゲニー・オネーギン〉に続いて、スイスのクララン滞在中の3～4月に、約1か月で作曲された。若手ヴァイオリニスト、コーテクが当地で紹介したラロの〈スペイン交響曲〉に刺激を受けて、一気に完成されたとみられており、ヴァイオリンの技法に関してはコーテクの助言を得ている。

チャイコフスキーは、ロシアの第一人者アウアーに初演を依頼したが、「演奏不能」との理由で拒否された。しかし、作品の価値を見出したロシアのドイツ系奏者アドルフ・ブロッキーが尽力し、1881年にウィーンで初演。大

物批評家ハンスリックから「悪臭を放つ音楽」と酷評されるなど評判は散々だったが、ブロッキーが積極的に紹介し続けた結果、人気を獲得し、ついにはアウアーも演奏するようになった。

曲は、情熱と哀愁に充ちた、協奏曲としては民俗的情緒が濃い作品。チャイコフスキーならではの旋律美が大きな魅力を成し、重音その他ヴァイオリンの技巧的な見せ場も多い。

第1楽章 アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ。二つの主題を中心に華やかさと哀感が交錯しながら進行。技巧的なソロが縦横に展開される。

第2楽章 カンツォネッタ、アンダンテ。弱音を付けたヴァイオリンによる甘美な歌が綿々と続き、切れ目なく次楽章へ。

第3楽章 フィナーレ、アレグロ・ヴィヴァチッシモ。歯切れ良い主題を軸にした、民俗舞曲風の躍動的なフィナーレ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

れるコラール風の部分は、一幅の水墨画を見るような感がある。

第6楽章 “トランペットを持った7人の天使”（中庸な速さで、ややゆっくりと“力強く恐ろしげに”）大太鼓が3回打たれて開始する。題名とは違って、ここにはトランペットは使われていない。前の楽章とは対照的にファゴット、ホルン、トロンボーンのみによる旋律がゆったりと力強く拡がり、それを金属打楽器が伴奏する。大太鼓の3音が、一つの旋律の開始と終止ごとに打たれて音楽の節目を知らせる。最後も大太鼓の3音で終わる。

第7楽章 “神は人々の目から涙をあまさず拭いたもう”（やや、ゆっくりと）静かな沈黙が意味を持つ楽章。弦楽器の高音部の幽かなトリル^{カス}にのって、木管楽器の下行モチーフが2回繰り返された後、ヒバリとクロツグミが歌う。もう一度下行モチーフが静かに現れた後、ヒバリが楚々^{そそ}と歌って終わる。

第8楽章 “星たちと栄光”（ゆっくりと）4音（シ、ファ、ミ、シb）を主題とする4部分から成り、第5楽章と並んで長い楽章。第1部は4音主題→弦楽器のトリル→鳥たち、のパターンを繰り返した後、4音主題と短いコラールとなり、各々の部分は総休止で区切

られる。第2部はコトドリから始まるさまざまな鳥の合唱で、それぞれ総休止で区切られる。第3部は第1部の再現と変容。最後は、コーダで「天にある神の栄光」と題されたコラールがトゥッティで壮大に響く。

第9楽章 “生命の樹に棲む多くの鳥たち”（中庸の速さで）25種の鳥たちがすだくように鳴く最も美しい場面。鳥たちはピッコロ、フルート、クラリネット^{カス}で奏され、トライアングルとシンバルが背後で静かに響き続ける。

第10楽章 “見えざる道”（やや、ゆっくりと）メシアンは4部分としている。第1部は導入部と総休止の後に、ホルンや管楽器群で主題が朗々と歌われる。第2部はこれを繰り返す。第3部は弦楽器全体のトリルに始まって、その上を木管楽器が高音で主題の後半を奏する。第4部は総休止の後、モズガラスが鳴いて、再び第1部冒頭を奏して終わる。

第11楽章 “キリスト、天国の栄光”（非常にゆっくりと“きわめて穏やかに、表現豊かに”）弦楽合奏の背後でトライアングルが静かに響き続ける。弦楽合奏は天国の光のごとく輝かしくゆったりと響く。山なりの主題は6回現れ、最後は上方に向かって昇り、高音部で消えるように終わる。

楽器編成／フルート6、ピッコロ3、アルトフルート、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット6、エスクラリネット2、バスクラリネット、コントラバスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット3、ピッコロ・トランペット2、トロンボーン3、チューバ3、打楽器（グロッケンシュピール、シロフォン、サスペンデッド・シンバル、アンティークシンバル、シロリンバ、マリンバ、チューブラーベル、トライアングル、ウインドマシーン、大太鼓、ウッドブロック、木魚、ギロ、ゴング、銅鑼、ムチ）、弦五部

チャイコフスキー 交響曲 第5番 ホ短調 作品64

作曲：1888年／初演：1888年11月17日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約44分

チャイコフスキーの三大交響曲（第4～6番）のひとつ。ロシアの全交響曲の中でも屈指の人気を誇っている。

交響曲第4番から約10年、指揮活動等での国外滞在が多く、創作活動は若干停滞気味だったチャイコフスキーだが、この間に西欧でブラームス、ドヴォルザーク、マーラーらと知り合い、近代的なオーケストラ演奏にも刺激を受けていた。そして1888年、好環境のフロロフスコエ村に居を構えたのを機に創作意欲が湧き上がり、3か月ほどで本作を完成。同年、自身の指揮によって初演された。このときは批評家の評価が低く、自らも否定的な感想を述べているが、翌1889年ハンブルクで成功を収めて以来、国際的な支持を獲得した。

手紙等で自作の内容を説明するケースが多かったチャイコフスキーも、この曲に関しては多くを語らず、標題等も示していない。しかし、第1楽章冒頭の重々しい旋律を「運命、もしくは神の摂理への完全な服従」と表現したことから、一般に「運命」がテーマだと解釈されており、その旋律は「運命動機」と呼ばれている。主な特徴は、

運命動機が“固定楽想”として各楽章に登場する点、第3楽章に通常のスケルツォではなくワルツを用いている点、暗い運命動機が終楽章では長調に姿を変え、勝利の凱歌で終結する点など。全体をみれば、深刻さ、甘美さ、情熱、歌、迫力等々、チャイコフスキーの魅力が満載された名曲である。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ・コン・アニマ。最初にクラリネットが運命動機を提示。主部は歩むような動きの第1主題とのびやかな第2主題を軸に、ダイナミックな展開を遂げる。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ。ホルンのソロで出る主題を中心とした、甘美で陶酔的な緩徐楽章。

第3楽章 ワルツ、アレグロ・モデラート。作曲者十八番の優美なワルツに、小刻みな動きの中間部が対比される。

第4楽章 フィナーレ、アンダンテ・マエストロ～アレグロ・ヴィヴァーチェ。壮麗な開始後、荒々しく刻まれる第1主題と、木管に出る第2主題を中心に突き進み、凱旋行進曲のような終結を迎える。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

2.11 [土・祝]

道下京子（みちした きょうこ）・音楽評論家

ドビュッシー（ビュッセル編曲） 小組曲

作曲：1886～89年、編曲1907年／初演：1889年（連弾）／演奏時間：約13分

クロード・ドビュッシー（1862～1918）は、近代フランスを代表する作曲家。彼はフランスの伝統である古典的明晰さを受容しつつ、ショパンやワーグナーの音楽をも継承して独自の音楽語法を確立した。

本日演奏される〈小組曲〉は、もともとピアノ1台4手のための作品。ドビュッシーのピアノ作品は、1890年ごろから積極的に作曲されるようになる。1886年に作曲が始められた〈小組曲〉は、彼のピアノ作品のなかでは最も早い時期の創作のひとつと言ってもよい。この連弾曲を、アンリ・ビュッセル（1872～1973）は1907年にオーケストラ用に編曲した。原曲のピアノ連弾はシンプルな書法が魅力の一つであるが、ビュッセルによるオーケストレーションは、色彩的な表現が加味され、見事な音の絵画に仕上げられた。

〈小組曲〉は、以下の4曲からなっている。

第1曲 “小舟にて” ハープの分散和音にのり、フルートが息の長い旋律線を歌い上げてゆく。タイトルは、象徴派の詩人ヴェルレーヌの詩集『雅なる宴』に由来する。

第2曲 “行列” この作品のタイトルも、『雅なる宴』と結びついている。フルートによって紡ぎ出された旋律をオーボエが模倣し、さまざまな楽器に引き継がれてゆく。原曲の躍動感は、弦楽器のピッツィカートなどによって鮮やかに引き立てられている。

第3曲 “メヌエット” 音楽に、ドビュッシーが1882年に作曲した歌曲〈雅なる宴〉（詩：バンヴィル）を取り入れている。ほのかに悲しみを帯びた旋律が印象的。

第4曲 “バレエ” 弦楽器が主旋律を奏でるなか、他の楽器は裏拍を打ち鳴らすことで、音楽にユニークな脈動が生まれる。優美なステップの中間部は、活発な主部とコントラストをなす。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、タンブリン）、弦五部

サン＝サーンス チェロ協奏曲 第1番 イ短調 作品33

作曲：1872年／初演：1873年1月19日、パリ／演奏時間：約19分

カミーユ・サン＝サーンス（1835～^{いしずえ}1921）は、近代フランスの音楽の礎を築いた作曲家である。神童としても知られ、2歳でピアノを、そして3歳で作曲を始めた彼は、10歳のときにパリのサル・プレイエルでデビューを果たした。その際、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番ハ短調作品37やモーツァルトのピアノ協奏曲第15番変ロ長調K.450などを演奏し、自作のカデンツァも披露したという。1848年にパリ音楽院に入学し、51年にオルガン科を修了。その直後から作曲や管弦楽法も学び、生涯にわたり膨大な数の作品を書き上げた。

サン＝サーンスは2曲のチェロ協奏曲を完成させた。本日演奏される第1番は、1872年の作品。ちょうどその前年、サン＝サーンスは国民音楽協会を創設し、86年に同協会を辞めるまでフランスの器楽の興隆に力を注いだ。彼の創作の最盛期に書かれた作品であり、息の長い旋律線は豊かで、生き生きとした音楽表現は魅力の一つである。また、この協奏曲は1楽章構成をとり、全体は三つの部分からなる。そして音楽は途切れることなく、続け

て演奏される。

なお、初演ではパリ音楽院教授のオーギュスト・トルベックが独奏を務め、作品は彼に捧げられた。

第1部 アレグロ・ノン・トロppo
イ短調。チェロ独奏は、冒頭からほの暗さを湛^{たた}えた振幅の大きな第1主題を情熱的に鳴り響かせる。起伏の穏やかなへ長調の第2主題も、チェロ独奏が表す。和声進行の見事な変化は、微妙なニュアンスを醸^{かも}し出している。

第2部 アレグレット・コン・モート
変ロ長調。遠くから響いてくるような弦楽器の刻みにのって、独奏チェロが主旋律をおおらかに歌い上げてゆく。三部形式に基づいており、中間部の終わりにチェロ独奏によるカデンツァが置かれている。

第3部 テンポ・プリモ（はじめの速さで）イ短調。第1部の第1主題が現れたのち、シンコペーションのリズムを含む第1主題をチェロが急^せき込むように示してゆく。ソナタ形式で書かれており、ゆったりとしたへ長調の調べが第2主題。コーダではイ長調へと転じ、音楽は華やかに結ばれる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏チェロ

サン＝サーンス 交響曲 第3番 ハ短調 作品78 〈オルガン付き〉

作曲：1886年／初演：1886年5月、ロンドン／演奏時間：約36分

1885年8月、サン＝サーンスはロンドン・フィルハーモニック協会から作曲の依頼を受け、交響曲第3番の創作に着手し、翌年に完成させた。ロンドンでの初演では、サン＝サーンス自らが指揮台に立った。リストはこの曲の初演の成功を祝す手紙をしたためたものの、その2か月半ののち、彼は帰らぬ人となる。作品はリストに捧^{ささ}げられた。サン＝サーンスにとって、彼は尊敬する音楽家の一人であった。代表作の歌劇〈サムソンとデリラ〉は、リストの助力によってワイマール（リストが宮廷楽長を務めていた街）で初演されていた。またサン＝サーンスも、リストの作品を積極的に取り上げた。

この交響曲の大きな特徴の一つとして、オルガンを取り入れていることが挙げられる。サン＝サーンスは、パリのマドレーヌ教会のオルガニストを務めていた。同様にオルガンを取り入れた編成は、リストの〈ファウスト交響曲〉〈ダンテ交響曲〉があり、彼との結びつきをうかがわせる。また、交響曲全体が循環形式で書かれている点も、リストの影響を示している。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太鼓、シンバル、トライアングル）、4手ピアノ、オルガン、弦五部

なお、交響曲全体は2楽章構成をとり、それぞれが二つの部分からなる。

第1楽章 第1部：アダージョ～アレグロ・モデラート ハ短調 ミステリアスな雰囲気漂う序奏に続き、動きの速い主部に入る。16分音符による第1主題はこの交響曲全体の循環主題であり、その音型はグレゴリオ聖歌の「怒りの日」に似ている。その後、美しい第2主題が変ニ長調で現れる。**第2部**：ポコ・アダージョ 変ニ長調 緩徐楽章にあたる部分。オルガンが登場したのち、弦楽器が優美な主旋律を奏でてゆく。

第2楽章 第1部：スケルツォ、アレグロ・モデラート ハ短調 ～プレス^ト ハ長調 軽快なスケルツォに相当する部分。アレグロ・モデラートとプレストが交互に現れる。**第2部**：マエストーゾ～アレグロ ハ長調 オルガンの響きがフィナーレの始まりを告げる。序奏では主題が対位法的に扱われていく。やがて主部に入り、第1主題は循環主題がベースとなっている。フーガの手法が取り入れられるなど、壮麗なフィナーレを彩っている。